国立歴史民俗博物館研究報告　第110集　2004年2月

もう一つの倭・韓交易ルート

Another Route of Trading Activities and Interaction between Wa and Han

白石太一郎

はじめに
❶全羅南道の前方後円墳
❷玄界灘沿岸地域と有明海沿岸地域
❸彩色装飾古墳の成立の背景
❹有明海沿岸勢力の朝鮮半島交渉
むすび

[論文要旨]

朝鮮半島の西南部に位置する全羅南道の西よりの地域では，5世紀後半から6世紀前半のごく限られた時期に盛んに前方後円墳が造営される。その中には円筒埴輪や倭系の横穴式石室をもつものが存在することからも，これが日本列島の前方後円墳の影響により出現したものであることは疑いない。それがそれまで倭と密接な関係を持っていた加耶の地域にはまったくみられないことは，この時期になって全羅南道の勢力が倭国ときわめて密接な関係をもつようになったことを示している。これはまた日本列島の須恵器の祖型と考えられる陶質土器が，初期の加耶のものから5世紀前半を境に全羅南道地域のものに変化することとも対応する。これらのことは，5世紀前半を境に倭・韓の交渉・交易の韓側の中心的窓口が加耶から全羅南道地域に変化したことを示唆している。

こうした韓側の窓口の変化に対応するかのように，倭国側でも対韓交渉の中心的担い手が，それまでの玄界灘沿岸地域から有明海沿岸地域に変化したらしい。5世紀前半以降，玄界灘沿岸ではそれまでみられた比較的大型の前方後円墳がみられなくなり，替わって筑後や肥前の有明海沿岸に大型の前方後円墳が営まれるようになる。一方，全羅南道地域の前方後円墳にみられる倭系横穴式石室は，北部九州でも有明海沿岸の肥前東南部や筑後地域の横穴式石室の影響により成立したものであることは疑いない。また複数の彩色を施した本格的な装飾古墳が成立したのが有明海沿岸の肥後の地であることも重要である。その成立に，朝鮮半島の古墳壁画からの何らか刺激を受けたことが考えられるからである。熊本県菊水町の江田船山古墳の豪華な金銅製装身具類などの副葬品もまた，5世紀後半から6世紀前半のこの地域の人びとの活発な対朝鮮半島交渉を示すものである。

日本書紀の敏達紀にみられる百済の高官日羅を「火葦北国造刑部靫部阿利斯登の子」とする記載もまた，有明海南部の葦北の首長の対百済交渉を示すものである。さらにその交渉を指示したのが大伴金村であったことも，こうした有明海沿岸各地の首長層の外交活動が倭国の外交活動に他ならなかったことを示している。さらに，玄界灘沿岸～加耶ルートの海上交通の安全を祈る沖ノ島の祭祀に有明海沿岸の水沼君が関わるようになるのも，対韓交渉の担い手が玄界灘沿岸から有明海沿岸にかわった歴史的事実を反映するものであろう。こうした検討結果からも，5世紀前半頃を境として，倭・韓の交渉・交易活動の中心的担い手が，朝鮮半島側では加耶から全羅南道地域の勢力に，倭国側では玄界灘沿岸の勢力から有明海沿岸の勢力へと変化したことは疑いなかろう。

はじめに

あらためて述べるまでもないが，日本列島の文明化，あるいは古代国家の形成に，倭と朝鮮半島南部諸地域との交渉・交易が果たした役割は決定的に大きい。その交流は縄文時代，あるいはそれ以前にも遡るが，その後の日本列島の歴史と文化を大きく規定することになる水田稲作農耕に基礎をおく生産経済，すなわち農耕文化が伝えられたのが，直接的にはこの地域からであったことは疑いなかろう。

さらに2〜3世紀になって，倭の国家形成をうながした直接的な契機が，まさにこの地域との交渉・交易をめぐる倭人間の確執にあったと，わたくしは考えている。すなわち，弥生時代以降の倭人たちにとって不可欠の生産素材となっていた鉄資源やその他の先進的文物の輸入ルートを独占的に支配していたのは，北部九州の玄界灘沿岸地域であった。したがって，より東方の瀬戸内海沿岸の諸地域や後に畿内と呼ばれる近畿地方中央部の政治勢力が，これらの先進的文物を安定的に入手しようとすると，北部九州勢力からこの輸入ルートの支配権を奪取する必要があった。このために近畿中央部の勢力と瀬戸内海沿岸諸地域の勢力が連合して，北部九州に対抗しようとしたことが，広域の政治連合形成の直接的契機になったものと想定されるのである［白石1993a・2002］。こうして成立した広域の政治連合が，『魏志』倭人伝にみえる邪馬台国を盟主とする倭国連合であり，この政治連合はやがて3世紀中葉以降のヤマト政権へと展開し，さらに7世紀後半以降の日本の律令制古代国家へとつながるのである。

一方文化史的にみても，倭国の文化は4世紀後半以降朝鮮半島の直接的な影響を受けて急速に東アジア化し，文明化する。それが高句麗の南下にともなう朝鮮半島の緊張の余波が倭国に及んだ結果によるものであることは疑いなかろう。倭国を味方に引き入れて高句麗と対抗しようとする百済や加耶諸国の思惑もあって，倭国はそれまでまったく関心を示さなかった馬匹文化を受入れて騎馬戦術を学び，高句麗軍と直接対決する。牧の設置による馬匹生産や馬具の製作技術の一貫として金属加工，木工，皮革などの進んだ技術が伝えられたばかりでなく，製陶（須恵器），土木，建築からさらに統治技術や文字，暦法，医学など学問や宗教を含む多様な文化が，直接海を渡った渡来人により伝えられ，倭国の文明化はそれ以前とはまったく異なった環境と条件下で飛躍的に進展するのである［白石1993b］。この5〜6世紀における倭の文明化は，きわめて急激なものであり，その基盤のうえに7世紀には飛鳥文化が開花することになる。

こうした，弥生時代以来の倭と韓の交渉・交易において，最も重要なルートであったのが弁韓諸地域と伊都国・奴国など玄界灘沿岸諸地域のと間の，対馬・壱岐を経由するルートであったことは，『魏志』倭人伝にみられる帯方郡から邪馬台国へのルートに関する詳細な記載などからも明らかであろう。またこの交易ルートで実際に交渉・交易を担当したのが，玄界灘沿岸地域の伊都や奴の人びとであったもとまた確かであろう。

もとより，海の道は何処にでも通じている。出雲や丹後といった日本海沿岸地域と韓との直接交渉も行われたことは疑いなかろう。ただ当時の航海技術の水準から考えても，壱岐・対馬を経由する，このいわば『魏志』倭人伝ルートともいうべきルートが最も安全で有利なルートであったこと

はいうまでもない。韓側では狗邪韓国，すなわち後の金官加耶国と，倭国側では伊都・奴両国を結ぶ彼我の交易ルートが，倭・韓交渉の大動脈であったことは疑う余地がないのである。このルートの海上交通の安全を祈る沖ノ島の神に対する祭祀が，4世紀後半以降国家的な規模で継続的に執り行われるのは，まさにこのためにほかならない。

ところが5世紀前半～中葉頃から，この玄界灘沿岸地域と洛東江河口地域とを結ぶ倭・韓の交易ルートにも大きな変化が生じる。それは，洛東江河口地域への新羅の進出などもあって，加耶でも金官加耶国を中心とする勢力がそれまで対倭交渉に果たした役割を果たせなくなり，代わって加耶でもより西よりの大加耶を中心とする洛東江中流域やその南の安羅，さらに西方の現在の全羅南道地域が，倭との交渉・交易においてより中心的な役割を果たすようになるのである。こうした情勢の大きな変化の背景には，この西よりの地域の背後，すなわちすぐ北方に，倭国の最も重要な交渉相手となりつつあった百済が控えていたことも大きく関係しよう。最近急速にその実態が明らかにされてきた，5世紀後半から6世紀前半の全羅南道地域にみられる前方後円墳の盛んな造営も，こうした倭との交渉・交易の担い手として全羅南道地域が浮上することと決して無関係ではない。

こうした倭・韓の交渉・交易ルートの韓側の窓口の大きな変化に対して，倭国側の窓口には大きな変化はなかったのであろうか。わたくしは，韓側の中心的窓口として新しく浮上してきた全羅南道地域に対応する倭国側の窓口として，新しく有明海沿岸諸地域の勢力が台頭してきた可能性がきわめて大きいと考えている。もちろん倭・韓の間の最も安全で有利な海上ルートは，玄界灘沿岸～壱岐～対馬～朝鮮半島南部というルートであることはいうまでもない。ただこのルートによって行われる実際の交渉・交易に中心的役割を果たした倭国側の勢力には，大きな変化があったと考えるのである。

小論は，5世紀中葉を境にして，従来の伊都・奴などの玄界灘沿岸勢力に替わって倭・韓交渉の倭国側の中心的荷担勢力となったのが，有明海沿岸の諸勢力にほかならないことを明らかにしようとするものである。さらに「加耶～玄界灘ルート」に替わって倭・韓の基幹的交渉・交易ルートとなったと考えられるこの「全南～有明海沿岸ルート」が果たした歴史的役割を考えてみることにしたい。(1)

❶……全羅南道の前方後円墳

筆者が小論で論じようとする，5世紀中葉以降における倭・韓の交渉・交易ルートの韓側の窓口が，東の加耶地域から次第に西の全羅南道地域に替わっていったことを最も端的に物語る考古学的な資料は，最近その実態が急速に明らかにされつつある全羅南道地域の前方後円墳のあり方である。その検討はまた，この韓側の窓口に対応した倭国側の窓口がいづれの勢力であったかを考える上にも有効である。

韓国の前方後円墳について，その存在を正確な測量調査にもとづいてはじめて明らかにしたのは姜仁求であり，その古墳は全羅南道海南郡北日面方山里の海南長鼓山古墳であった［姜仁求1987］。それは1987年のことであったが，その後相次いで類例が発見・確認され，現在では確実と判断されるものが全羅南道で12基，全羅北道で1基の合計13基ある（図1参照）。そのうち全羅北道の

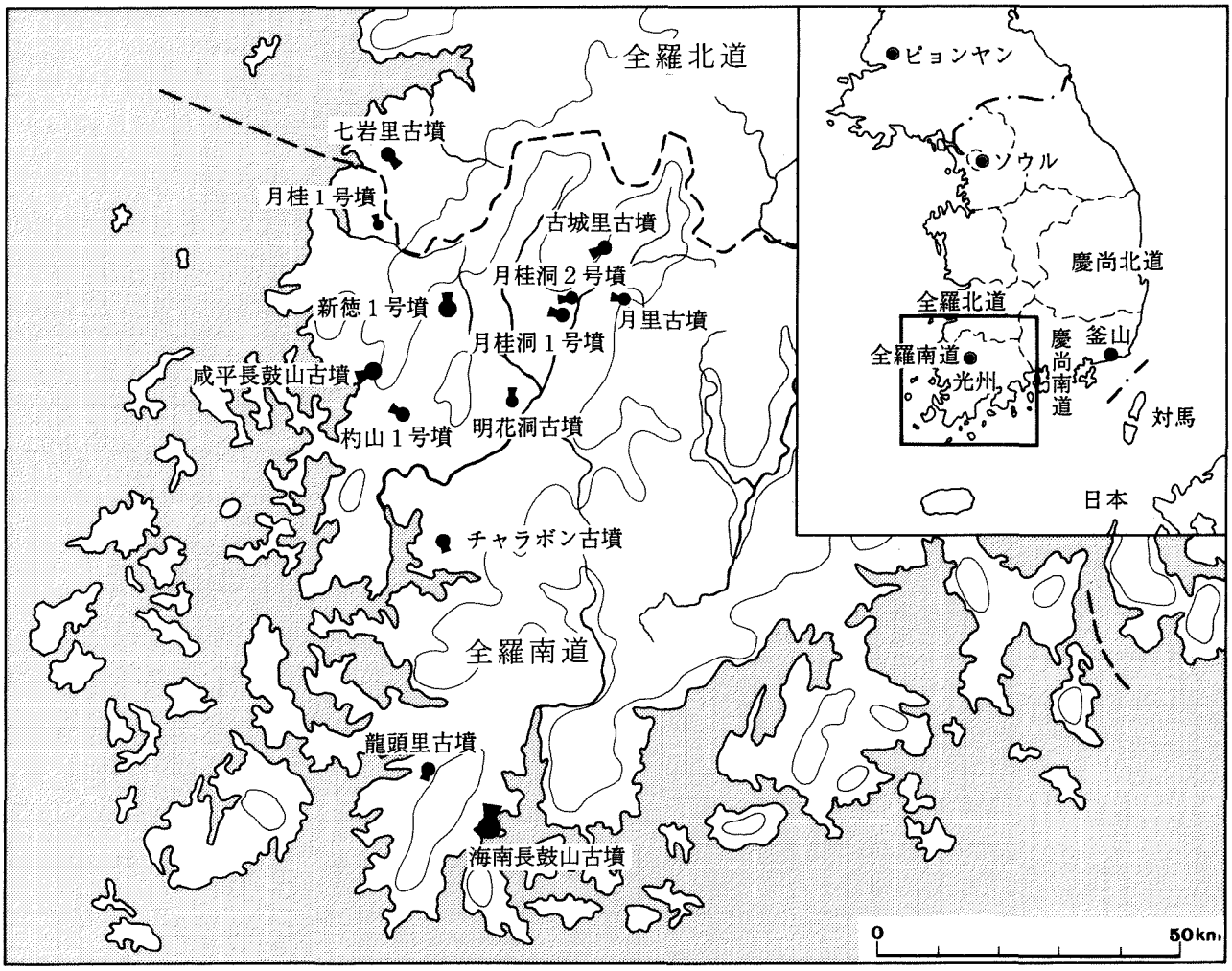

図1　韓国の前方後円墳分布図

1基は，同道高敞郡の七岩里古墳であるが，それは全羅南道でも南よりの海岸に近い位置にあり，韓国の前方後円墳がほぼ全羅南道を中心に分布していることには変わりない。

図1の分布図に明らかなように，その分布は全羅南道でもその西よりの地域に偏っており，栄山江流域付近に多いことは事実である。ただ最大の墳丘規模をもつ海南長鼓山古墳が南部の海南郡にあること，最も集中する光州市付近のものが比較的小規模であることなどを考慮すると，むしろ日本列島でのあり方に比べて分布の中心がなく，全羅南道の西よりのいくつかの地域に広く分布していることを注意すべきであろう。またその造営期間は，朴天秀が詳しく考証しているように5世紀後半から6世紀前半の，おそらく西暦500年を中心とする半世紀以内に収まるようである(2)［朴天秀2002a］。このため同一の地域にも1基ないし2基がみられるにすぎず，3代にわたって造営された例は無いようである。

その墳丘規模は，最大の海南長鼓山古墳が77m，最小の光州市光山区の明花洞古墳が33mであり［朴仲煥1996］，40～50m程度のものが多い。それらをこの時期，すなわち古墳時代後期前半ころの日本列島の前方後円墳と比較すると，この段階にも大型の前方後円墳が造営される畿内地域や

関東地方を別にすると，必ずしも小規模なものとはいえない。

日本列島の前方後円墳との近親性や関係性が問題になるが，墳丘形態については日本のこの時期の中小規模の前方後円墳の墳丘形態にも大きな偏差があり，簡単に結論付けることは難しい。日本の前方後円墳に顕著にみられる段築についても，墳丘長51 mの敝平郡月也面礼徳里新徳1号墳［成洛俊1992］や光州市光山区明花洞古墳では認められるものの，最大の海南長鼓山古墳を含めてその他の例には現在のところ認められていない。葺石についても，新徳1号墳にそれらしい石組がみられるものの，他の古墳では未確認である。また周壕についても光州市光山区月桂洞1号墳，同2号墳，同明花洞古墳に鐘形，ないしそれに近い形態の周壕がみられるが，それ以外の例では確認されていない。

さらに埴輪については，やはり光州市域の月桂洞1号，同2号，明花洞の3古墳で円筒埴輪が確認されており，特に月桂洞1号，同2号墳［林永珍1994］では朝顔形埴輪も検出されている。また明花洞古墳では墳丘麓のテラス上に約50 cmの間隔で一列に並んだ状況で検出されており，日本の古墳の場合と同様な樹立法が採られていた。全羅南道のやはり栄山江流域の羅州市にある新村里9号墳［金洛中1999］は，南北30 m，東西27 mの方墳であるが，ここでも朝顔形や台上に壷を載せた形の埴輪状の土製品が検出されており，これも日本の埴輪の影響によって出現したものと想定されている。

このように，この地域の前方後円墳にはそれぞれ少なくない差異があり，日本の前方後円墳と共通する要素が多くみられるものと少ないものがある。ただ，円筒埴輪とみなされる土製品を墳丘上に樹立するものがみられるところからも明らかなように，それが日本列島の前方後円墳の影響を受けて造営されたものであることは疑いない。地域により日本列島のそれとの近親性に強弱があり，現在知られる中では光州市域の3例が日本列島のもと共通する要素が多く認められ，きわめて近い関係にあることがうかがえる。このことは，後述する埋葬施設の横穴式石室の様式からもいえることである。

以上の検討からも明らかなように，全羅南道の前方後円墳はその墳丘の様相からみても，地域により大きな差異がある。またその分布のあり方も日本列島のそれとは大きく異なっている。ただ全体として，それが日本列島の前方後円墳の影響により成立したものであることには疑いをさし挟む余地はないといえよう。しかもその分布が，一部全羅北道の南部を含むとはいえ，基本的に全羅南道の西半部に限られるが，このことはきわめて重要な問題を提起している。とりわけ弥生時代並行期以来，倭国との関係が最も深かった慶尚南道の加耶地域にまったくみられないことはきわめて重要であろう。その点で姜仁求が最初に前方後円墳の可能性を指摘した慶尚南道固城郡固城邑松鶴洞の舞妓山古墳（松鶴洞1号墳）［姜仁求1987］は，早くに指摘したように前方部とされていた部分の前面が明らかに円弧をなし，日本列島の前方後円墳とは似て非なるものである［白石1986a］。さらに最近の調査によって，それぞれ時期を異にし，それぞれに横穴式石室をもつ3基の古墳が接合されたもので，前方後円墳でないことが確認された［東亜大学校博物館2000］。もちろん最終的にこうした墳形に形成されたのには，日本列島の前方後円墳の影響が存在した可能性まで否定する必要はないが，いずれにしても全羅南道の前方後円墳とは異質の存在である。

5世紀段階まで倭国と密接な関係を持っていた加耶地域には，こうした前方後円墳がまったくみ

られないことは興味深い。これに対して，それまであまり倭国と直接的な関係が認められなかった全羅南道西半部を中心とする地域に，13基もの前方後円墳がみられるようになることは，5世紀中葉以降この全羅南道地域が，それ以前の加耶地域以上に倭国と密接な関係を持つようになったことを示すものにほかならないと思われるのである。

なお，この全羅南道の前方後円墳の被葬者像に関してはさまざまな見解が提起されているが，それらの中で注目されるのはそれをこの地の在地首長ととらえる説と百済に属した倭人ととらえる説の二つの解釈であろう。前者は，5世紀後半のこの地「慕韓」の勢力が百済の進出に対抗して倭との政治的関係を示すための「政治的アッピール」として造営したとするもので，田中俊明［田中2001］や柳沢一男［柳沢2001］らが主張するものである。後者は，百済がこの地の領有化を進めるために派遣した百済王臣下の倭人の有力者であろうとする山尾幸久［山尾2001］や朴天秀［朴天秀2002a］の説である。この問題の解決のためには，全羅南道の前方後円墳の副葬品のさらに精緻な分析と，この地域の古墳分布の総体の中での位置付けが必要であろうと思われる。その点で，これらの前方後円墳が，全羅南道地域では従来古墳が造営されていなかった地域に突如として出現しているとする朴天秀の指摘はきわめて重要な意味をもつと思うが，さらに今後の研究を見守りたい。

このように5世紀中葉以降，全羅南道の西半の地域が，それまで加耶が倭国との間にもっていた以上に緊密な関係をもつようになったことは，倭国で生産されるようになる須恵器に影響を与えた陶質土器が，やはり5世紀前半のある段階を境に加耶地域のものから全羅南道のものに転換していることからも裏付けられる。この須恵器生産の始まりの問題については，今回の国際シンポジウムで酒井清治が報告したように，大阪府陶邑窯の大庭寺窯段階の須恵器が加耶の陶質土器の系譜を引くものであったのに対し，陶邑窯編年のTK 216型式の段階になると明らかに全羅南道の栄山江流域系の陶質土器の系譜を引くものに転換している［酒井2002］。わたくしは，大庭寺窯段階については4世紀末から5世紀初頭，TK 216段階については5世紀前半の暦年代を想定している［白石1985］から，まさに5世紀前半を境に大きな変化が生じていることが知られるのである。

全羅南道の陶質土器が倭国の須恵器生産に大きな影響を与えるようになる時期と，この地域に前方後円墳が出現する年代には若干のずれがあるが，古墳がそうした新しい状況を生み出した人たちが亡くなってはじめて造営される墳墓であること考えると，それはむしろ当然のずれであろう。こうした倭国における須恵器生産と全羅南道の陶質土器の関係や倭系の特異な首長墓である前方後円墳がこの地域の出現することからも明らかなように，倭・韓の交渉・交易の韓側の中心的な担い手が，5世紀前半のある段階を境に加耶から全羅南道に移ったことは，少なくとも考古学的な検討からは疑うことができない。

❷……玄界灘沿岸地域と有明海沿岸地域

前節での検討からも知られるように，5世紀前半から中葉ころを境に，倭・韓の交渉・交易ルートの韓側の中心的な担い手が，東の加耶の勢力から西の全羅南道の西半の地域の勢力に移ったことは確かであるが，一方の倭国側には変化はなかったのであろうか。次に，倭・韓の交渉・交易の新しい担い手として浮上してきた全羅南道の勢力に対応した倭国側の勢力は何処の勢力であったのか

を考えてみよう。

もちろん，5世紀前半に全羅南道の陶質土器生産が影響を与えたというか，より具体的にいえば，全羅南道の陶質土器工人が倭に渡って土器生産に従事したのは，主として近畿地方中央部の河内であった。それはこの時期の倭王権の中枢が畿内にあったためで，それまでの加耶地域の諸勢力と同じように，全羅南道の勢力が交渉をもった相手がヤマト王権それ自体であったことはいうまでもない。ただここでわたくしが問題にしたいのは，より直接的にこの交渉・交易を担当した勢力の問題であり，5世紀前半以前と同じように依然として玄界灘沿岸の勢力がその中心的荷担者であったかどうかという問題である。

少なくとも4世紀後半から5世紀初頭までの段階では，玄界灘沿岸の勢力が倭・韓の交渉・交易活動の中心的担い手であったことは，日本列島における初期横穴式石室の受容のあり方からも疑いない。日本列島で最も古い横穴式石室は，すべてこの玄界灘沿岸地域に集中する。しかもそれは，かって論じたように朝鮮半島の特定地域の横穴式石室の様式がそのまま受容されたのではなく，この地域で営まれていた竪穴式石室に横穴式石室のアイディアを取り入れて，この地域で生み出されたものにほかならないことが重要である［白石 1986b］。佐賀県浜玉町谷口古墳後円部の東西の横穴式石室は，長持形石棺の下半を土壙に収めた上に営まれたこの時期特有の竪穴式石室の南壁の上部に出入口を設けたものである。またこれに近い時期の福岡市老司古墳や同鋤崎古墳の石室もまたこれと同様の性格をもつ横穴式石室であって，これとまったく同形式のものを朝鮮半島に見いだすことは出来ない。

さらに注目されるのは，これら初期の横穴式石室を採用しているのは，谷口古墳が墳丘長77 m，鋤崎古墳が62 m，老司古墳が90 mの前方後円墳であり，それぞれ末盧，伊都，奴の地域の最有力首長墓と想定できることである。4世紀後半から5世紀初頭頃の玄界灘沿岸各地の首長たちは，自ら朝鮮半島に赴き，彼の地で追葬に便利な横穴式石室を見て帰り，従来の竪穴式石室にそのアイディアを取り入れてまったく新しい横穴系の石室を生み出したのである。このことは，この段階ではまだ玄界灘沿岸の勢力が，倭・韓の交渉・交易の最前線でその任にあたっていたことを明白に物語っているものといえよう。

もともと玄界灘沿岸地域は，あまり大きな前方後円墳が造られなかった地域である。それでも5世紀の初頭段階までは墳丘長が100 mに近い規模の前方後円墳が造営されていたが，5世紀の前半になると急速に衰退し，伊都，奴を含む筑前地域でも，末盧を含む肥前地域でも中型の前方後円墳もみられなくなる。これにかわって筑紫では筑後の有明海沿岸から筑後川の流域に100 mをこえる前方後円墳が営まれるようになる。5世紀前半の福岡県広川町石人山古墳（墳丘長130 m），6世紀前半の八女市岩戸山古墳（墳丘長140 m）など北部九州を代表する大型前方後円墳はいづれもこの地域にみられるようになる。これは肥前でもまったく同様で，5世紀前半には佐賀平野に肥前最大の前方後円墳である佐賀県大和町船塚古墳（墳丘長114 m）が出現する。

こうした首長墓クラスの前方後円墳のあり方からうかがうことの出来る，5世紀前半以降における玄界灘沿岸地域の衰退と，それに替わる有明海沿岸地域の伸張は，倭・韓の交渉・交易ルートの中心的担い手の交替を示唆していることは確実であろう。このような状況証拠だけではなく，より具体的にこのことを物語る考古学的材料がないか，さらに検討してみよう。

韓側で新しく倭・韓の交渉・交易ルートの中心的な担い手となった全羅南道西部の勢力に対応する倭国側の交渉相手を探る上に重要な材料を提供してくれるのは，全羅南道の前方後円墳に採用されている倭系の横穴式石室の問題である。この問題については，最近の韓国における発掘調査の成果を踏まえて，柳沢一男がすぐれた研究を発表している［柳沢2001］。

柳沢は，全羅南道地域の前方後円墳やこの時期のその他の古墳に採用されている倭系の横穴式石室を栄山江型石室と名付け，それらは九州の北部九州型石室と肥後型石室を祖形とするものと，それらの発展形式からなると考えている。氏はこの栄山江型石室を造山類型，新徳類型，月桂洞類型，鈴泉里類型，長鼓峯類型の五つの類型に分類する。

造山類型は海南郡造山古墳［除聲勲・成洛俊1984］や前方後円墳の明花洞古墳にみられる長方形プランの玄室に，両側に板石を立て上下に楣石と梱石を配した玄門を設け，その前にハの字形に開く前庭側壁をもつものである。玄室の壁は下方に板石を立てた腰石を置き，その上に割石なし塊石を積み上げたもので，奥壁はほぼ垂直で左右両壁はわずかに持送りをもち，天井はあまり高くない。

新徳類型は，前方後円墳の新徳古墳や時期を異にする数多くの埋葬施設をもつ特異な方形墳である伏岩里3号墳［金洛中2001］の96年調査石室などにみられるものである。その平面形や腰石をもつ壁面の構成は造山類型と同じであるが，これに比べて玄室の天井が高く左右両壁の持ち送りがさらに顕著になる。また伏岩里3号墳の96年調査石室は，細長くほとんど開かない羨道が付き，この点も造山類型とは異なる。

月桂洞類型は，光州の前方後円墳である月桂洞1号墳，同2号墳にみられるものである。両例とも石室の上半部を失っており，全体構造は不明である。長方形プランの玄室など造山類型や新徳類型に近いが，ただ壁面の下部から割石で構築されているところが前の2類型とは異なる。

鈴泉里類型は長城郡の鈴泉里古墳［李榮文1990］にみられるもので，月桂洞類型にくらべて玄室はやや幅広であるが，壁面は下方から割り石を積み上げて構築したものである。他の諸類型に比べて壁面の持送りがより顕著であり，玄室の平面の前方の隅角が隅丸形をなしていること，玄門部の幅が広いこと，さらに玄門の立柱石が二重になっているなど，やや特異な形態を示す。

長鼓峯類型は，全羅南道最大の前方後円墳である海南長鼓峯（山）古墳の横穴式石室がそれにあたる。それ以外の諸類型に比べると，玄室の平面がきわめて長く，さらに長い羨道をもつ。玄室から羨道の端まで天井の高さは，一段下がる玄門部をのぞいてほぼ同じ高さである。玄室の壁面は下段に腰石を置き，その上に割石ないし横長の塊石を積上げている。玄門部は，大型の板石を向かい合わせに立てて，側壁との間に板石積みの壁体を挟んだ変則形であるという。

柳沢は，これら栄山江型の五つの類型のうち，造山類型については北部九州型に属する福岡県苅田町番塚古墳例に，新徳類型についてはやはり北部九州型の福岡県桂川町王塚古墳例に，鈴泉里類型については肥後型に属する熊本県山鹿市臼塚古墳例に酷似していることを指摘する。そして，全羅南道地域にこれら栄山江型石室の先行型式と認められるような横穴式石室がみられないことから，これら3類型については九州の近似する石室の造営地から直接移入されたもの（図3）であり，九州の石室に直接系譜関係を想定できない月桂洞類型，長鼓峯類型についても，九州系の石室と無関係に成立したものではなく，それがこの地で発展・変形したものとしている。

この柳沢の指摘には教えられるところが多いが，ただ氏が「酷似」するという番塚古墳例と造山

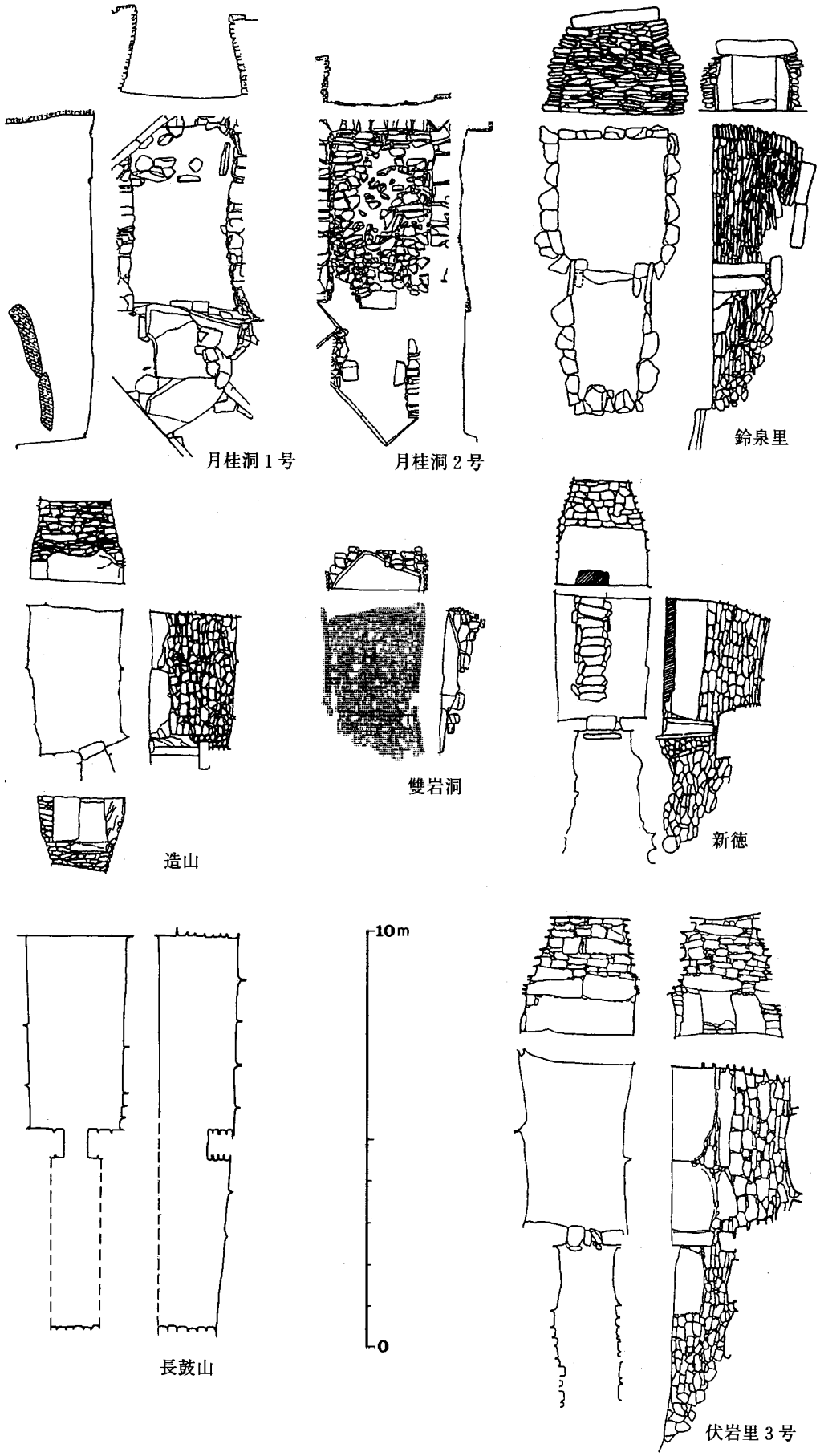

図２　全羅南道の倭系横穴式石室（柳沢一男による）

古墳例，王塚古墳例と伏岩里3号古墳例，臼塚古墳例と鈴泉里例の間には少なくない相違点も見いだされ，とても「酷似」しているとはいえず，両者に直接的系譜関係を想定することには疑問を感ぜざるをえない。柳沢が群馬県前橋市前二子古墳例との関連性を指摘するやや特異な形式の長鼓峯古墳類型については保留するとしても，それ以外の4類型が九州の横穴式石室と同系統のものであることについては，筆者も同感である。ただ，氏の指摘する九州内の類似例から直接的に移入されたものであることまで論証できているとは考えられないのである。

全羅南道の前方後円墳それ自体が，日本列島の前方後円墳に近似しながらもそれぞれ少なくない差異が生み出されていたのと同様に，この地域の横穴式石室も九州の横穴式石室の影響をうけて営まれたものでありながら，それぞれ少なくない変容をとげていることは明らかである。したがって，現在知られる資料だけで，九州の特定の遡源地を想定するのは困難であろうと思われる。造山古墳例，新徳古墳例はともに腰石の上に板石を積上げた壁面をもつ長方形プランの玄室に，板石を立て楣石を配した玄門の前にハの字形の羨道ないし墓道を付けたもので，たとえば佐賀県関行丸古墳例に代表されるような，5世紀後半から6世紀前半の北部九州型石室の影響を受けたものであることは疑いなかろう。また壁の腰石を持たない月桂洞類型もそれらの変異形態と理解することができよう。さらに鈴泉里類型については，玄門立柱石の二重配置についてはともかく，肥後型の石室との距離は大きく，これを肥後型の直接的影響下に成立したと考えるには無理が大きいと思われる。

以上要約すると，柳沢のいう栄山江型石室の多くは，北部九州の有明海沿岸の北部を中心とする広い範囲で5世紀後半から6世紀前半に造営されていた北九州型横穴式石室に近い型式のものであり，全羅南道の倭系横穴式石室の成立に一定の役割を果たしたのは，この地域から彼の地に渡った倭人たちであった可能性が大きいと思われる。また柳沢の指摘する近似例に玄界灘沿岸の例がまったくみられないことも示唆的である。全羅南道の倭系横穴式石室のあり方からみるかぎり，5世紀後半から6世紀前半に彼の地と最も深い関係をもっていたのは，北部九州でも有明海沿岸の地域であったことが知られるのである。

❸……彩色装飾古墳の成立の背景

このように，全羅南道の前方後円墳などにみられる倭系の横穴式石室については，有明海沿岸でも筑後から肥前の地域の影響によって彼の地に成立した可能性が大きいと思われる。ただこの時期，有明海沿岸でも南の肥後の勢力もまた倭国の水運活動に大きな役割を果たしていたことが多くの資料から想定できる。

高木恭二が明らかにしたように，4世紀後半から6世紀前半にかけて，肥後北部の菊池川下流域，肥後中部の宇土半島基部，肥後南部の氷川下流域の3ヶ所で，阿蘇溶結凝灰岩を用いた舟形石棺の製作が盛んに行われ，それは瀬戸内海沿岸各地から畿内にまでもたらされている［高木1994］。刳抜式の石棺といった重量物の遠隔地への運搬には，それなりの運搬技術と航海術を必要としたことはいうまでもなかろう。この点からも有明海沿岸の肥後各地の勢力の水運力が列島内ばかりでなく，朝鮮半島などとの交渉・交易にも大きな力を発揮したことは疑いなかろう。

そのことはまた，彩色をともなう本格的な装飾古墳が最初に生み出された地域が，まさにこの地

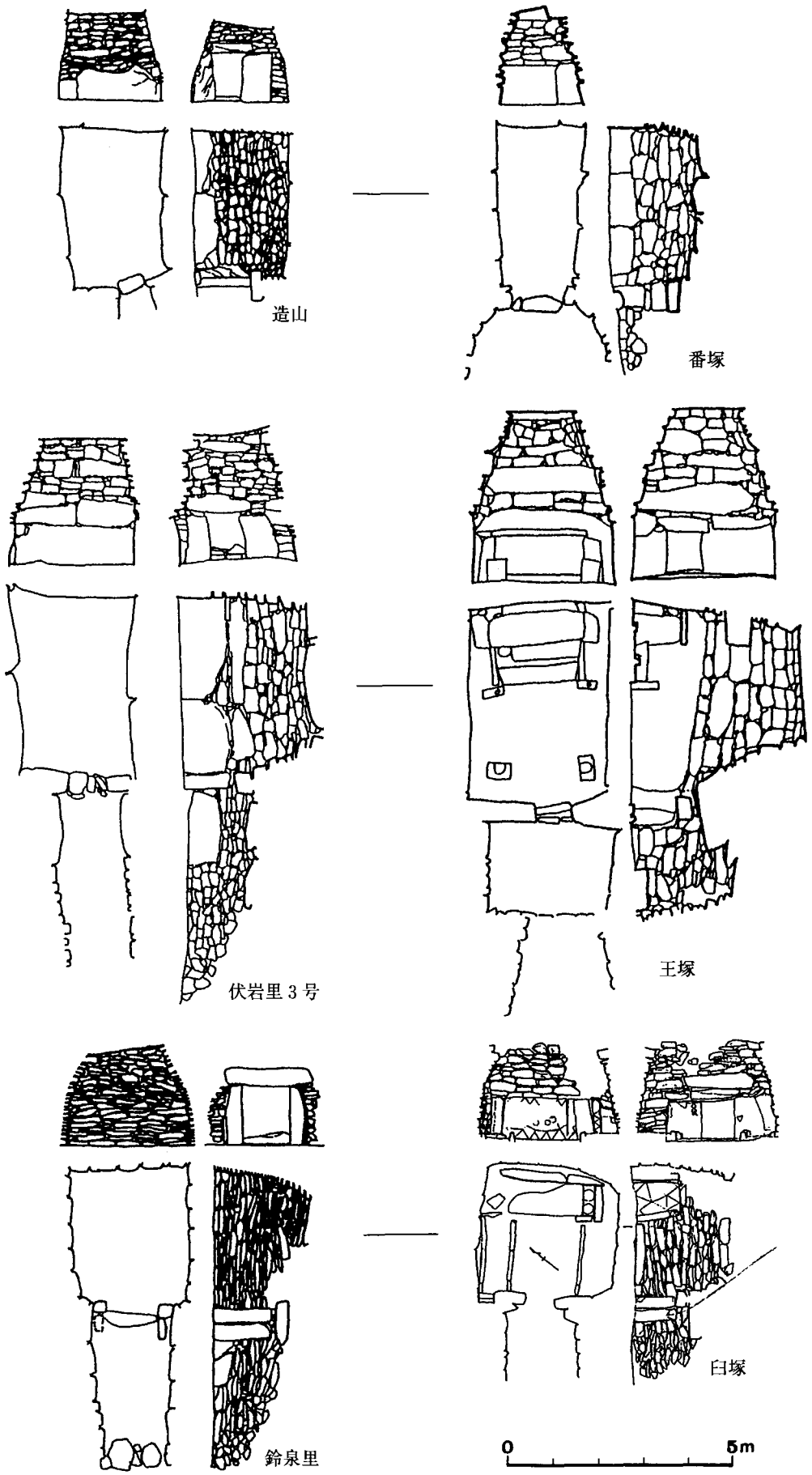

図３　柳沢一男の想定する全羅南道と九州の横穴式石室の相関関係

域であったことからも裏付けることが可能であろう。次にこの問題について考えてみよう。

日本列島の装飾古墳については，早くに小林行雄が石棺系，石障系，壁画系，横穴系の4者に分類している［小林1964］が，この分類は日本の装飾古墳の変遷過程をあと付けるのに有効である。日本の装飾古墳の成立は，古墳時代前期から中期でも早い時期の4世紀の石棺にみられるもので，大阪府羽曳野市玉手山古墳群の安福寺所在の割竹形石棺の棺蓋には，その棺身と接する部分の外面に長く直弧文が線刻されている。この直弧文がモノや霊を封じ込める，あるいは逆に邪悪なものをしりぞける辟邪の意味をもった文様であることは多くの研究者が指摘しているところである。また福井市小山谷古墳の舟形石棺の蓋には，複数の銅鏡が浮彫りで表現されている。これまた古墳の竪穴式石室内で棺のまわりに多数の銅鏡を立て並べるのと同じ思惟にもとづくもので，棺内に眠る死者を悪しき者から護る意味をもつものであった。

5世紀になっても，福岡県広川町の石人山古墳の竪穴式石室内に置かれた横口式の家形石棺の蓋部には，やはり直弧文と鏡を表したと思われる円文が彫刻されている。さらに横口式石棺が石室化した福岡県久留米市の浦山古墳では，石棺内面にも直弧文や円文などが線刻されていて，この段階の装飾古墳の図文がすべて辟邪の意味をもつものであったことを示している。また熊本県の不知火海沿岸の八代市大鼠蔵東麓古墳の組合式の石棺の内部には，鏡を表した同心円文とともに弓，矢を入れる靫，大刀，短甲などの武器・武具が線刻されている。これらの武器・武具もまた辟邪の意味をもつものであることはいうまでもなかろう。

こうした石棺系の装飾古墳に次いで出現するのが，石障系の装飾古墳である。5世紀の前半には，肥後を中心に正方形に近い平面形の玄室をもち，壁面の持送りが特に顕著でドーム状の天井をもつ肥後型横穴式石室が発達する。その玄室壁面の下部には石障と呼ばれる板状の石材をめぐらし，さらに仕切り石で複数の遺骸安置施設を区画する。この石障の内側の面にさまざまな浮き彫り，あるいは線刻の文様を刻んだものが石障系の装飾古墳である。その古い例としては5世紀の早い段階のものであるが，何らかの理由でこの肥後型石室が岡山市千足古墳に営まれる。ここには肥後から運ばれた石材に直弧文の文様が彫刻されている。

5世紀前半には，熊本市千金甲1号墳のように，石障に同心円文と直弧文の省略型式である斜交線文，靫などを浮彫りで表し，これに赤・青・黄の彩色を加えたものが出現する。さらに5世紀中葉ころには，熊本県嘉島町井寺古墳のように，石障に線刻で直弧文と円文を表し，赤・白・青・緑の4色の彩色をほどこした例も現われる。それ以前の石棺系の諸例では棺に赤色顔料を塗抹している例はあっても，複数の顔料で図文の細部を描き分けるものが現われたことは，日本列島における装飾古墳の展開過程のなかで，画期的な出来事であったといえよう。

こうした段階をへてやがて6世紀はじめになると，福岡県日ノ岡古墳例のように横穴式石室の壁面に直接彩色で図文を描く壁画系の装飾古墳が現われ，6世紀中葉には福岡県桂川町王塚古墳のように見事な彩色壁画を持つ古墳が出現する。そして壁画のモチーフも単に辟邪の図文だけでなく，さまざまな意味をもつ複雑な内容の図文が描かれるようになるのである。またこの頃から横穴の内部や外面にさまざまな図文を彫刻，ないし線刻，あるいは彩色で表現した横穴系の装飾古墳も出現するのである。(3)

わたくしは，こうした日本列島における装飾古墳の展開過程のなかで，複数の彩色を用いて図文

を表現するようになる最初の段階の石障系の装飾古墳が出現するのが，まさにこの有明海沿岸の肥後の地であることに重要な意味があると考えている。かつて松本雅明は，装飾古墳はまず肥後の白川から球磨川下流域におよぶ火君文化圏におこり，菊池川流域の玉杵名君文化圏をへて筑後川流域の筑紫君文化圏へと広がったと考えた。そして天草の装飾古墳に注目し，天草の漁労生活者を水先案内として高句麗と交渉をもった肥後南部の勢力が，高句麗の壁画古墳の影響を受けて装飾古墳を生み出したものとした［松本 1973］。

この松本雅明の問題提起は，きわめて興味深い。もちろん肥後南部の勢力が高句麗との直接的接触によって装飾古墳を受け入れたのかどうかまでは実証できない。しかし，複数の彩色を用いた本格的な装飾古墳が，まずこの有明海沿岸の肥後の地で成立する背景には，この時期，肥後など有明海沿岸の勢力が朝鮮半島との交渉・交易に積極的に従事していたという歴史的前提があってはじめて理解が可能になるのである。もちろんその受容は，松本が考えたような直接的なものではなく，これまた一種の刺激伝播であろう。彼の地では彩色を用いた壁画が墓室に描かれていることを知って，そのアイディアを石障の浮彫りないし線刻の図文に取り入れたのであろう。

本格的な装飾古墳は玄界灘沿岸地域ではほとんど見いだすことが出来ない。こうした彩色を用いた装飾古墳がまず5世紀前半の肥後の地に現われることからも，有明海沿岸でも南部の諸勢力もまた朝鮮半島との交渉・交易に積極的に活躍していたことは疑いないものと考えられる。そして，彼らが最も深い接触をもったのは，装飾古墳はみられないが，百済，安羅など加耶でも西部よりの地域，さらに全羅南道の地域の人たちであったことは確かであろう。

❹……有明海沿岸勢力の朝鮮半島交渉

有明海沿岸の勢力が韓との交渉・交易に重要な役割を果たしたことを具体的に物語る考古学資料として熊本県菊水町江田船山古墳がある。この古墳は，有明海に注ぐ菊池川中流域の清原古墳群に所在する墳丘長62mの前方後円墳で，その後円部に横口式の石棺式石室があり，銀象眼の銘文をもつ江田船山大刀や多量の金銅製装身具類を出土した古墳としてよく知られている。

わたくしは，かつてこの古墳の膨大な遺物群を三相に分けて考えたことがある［白石 1997］。すなわち，まず金銅製冠帽，長型垂飾付耳飾，金銅製帯金具，竜文鉄地金銅張鏡板をともなう馬具，横矧板鋲留短甲，衝角付冑など5世紀後半頃のものと想定される古相の遺物群がある。また亀甲繋文広帯式金銅冠，短型垂飾付耳飾，亀甲繋文金銅製飾履，横矧板皮綴短甲，鉄製素環鏡板付轡や鉄製輪鐙をともなう馬具など6世紀初頭頃の新相の遺物群が抽出できる。さらに宝珠形立飾付狭帯式金銅冠やこの冠と同工の斜格子文をもつ半筒形金銅製品，垂飾をともなわない金環など6世紀前半頃の遺物が最新相の遺物群として分離できるのである。

「獲□□□鹵大王」の銀象眼銘をもつ大刀は，このうち新相の遺物にともなう可能性が大きく，また石室内から出土した百済の陶質土器と考えられる蓋杯と提瓶もまた新相の遺物群にともなうものであろう。このほか6面の銅鏡や多数の刀剣類などにもこれら各時期のものが含まれていることはいうまでもなかろう。

この三相に分離できるすべての遺物群に，朝鮮半島系の金銅製装身具類がそれぞれセットで含ま

れていることは注目される。このうち古相の金銅製冠帽，新相の短型垂飾付耳飾などは百済製である可能性が大きい。また新相の亀甲繋文広帯広帯式式金銅冠やそれと同じ亀甲繋文をもつ金銅製飾履については，広帯二山式の冠が朝鮮半島には見られず，日本列島に多い形式であるところからも日本列島で作られた可能性が大きいが，飾履の接合法からもそれらが百済系の様式に属するものであることは確かである。また朴天秀は，古相の遺物群の長型垂飾付耳飾，金銅製帯金具，竜文鉄地金銅張鏡板をともなう馬具などを大加耶系の遺物と考えている〔朴天秀 2002 b〕。

このように，江田船山古墳には3代にわたる，あるいは世代を異にする3人の被葬者—それはおそらく1人の首長とその地位を継がなかった2人の息子である可能性が大きいと思われるが—が合葬されていることはほぼ確実であろう。彼らのうち第1，第2の被葬者が，いずれも日本列島の他の古墳にはあまり例を見ない豪華な百済製，ないし百済系の金銅製装身具類を保持していることは，彼らが朝鮮半島，それも百済との交渉・交易に関わっていたことを示すものにほかならない。また初葬の被葬者の段階には，大加耶系と想定できる遺物が多く含まれていることも興味深い。この時期にはまだ大加耶など加耶西部との交渉が重要な意味を持っていたのであろう。さらに新相の遺物群の中に，百済の陶質土器が含まれていることも重要である。それは他の百済系遺物とともに，彼らの主たる交渉相手が百済であったことを具体的に示す資料にほかならないからである。

さらに，この江田船山古墳の被葬者の性格については，この古墳から出土している銀象眼銘大刀が，多くの重要な示唆を与えてくれる。わたくしのこの有銘大刀やその銘文に関する解釈はすでに示したところ〔白石 1997〕であるが，この大刀がこの古墳の初葬の墓主その人の持ち物ではなく，追葬された子息のものと判断されることなどいくつかの理由から，大刀を製作したムリテはこの肥後の古墳の被葬者ではなく，畿内の有力豪族の族長であろうと考えている。こうしたムリテ中央豪族説に反対する論者は，ムリテとその一族にとってこそ意味のある有銘大刀を他人に与える理由がないとするが，むしろこの点にこそ，江田船山古墳の被葬者の占めた重要な歴史的役割が示されているのではなかろうか。

わたくしは，ムリテを例えば大伴氏のような，中央で朝鮮半島の諸国・諸勢力や中国の南朝との交渉，すなわち外交を担当していた中央豪族の族長と考えている。当時，ヤマト政権の対外交渉を実際に担当していたのが有明海沿岸各地の諸勢力であったことは，今まで述べてきたところからも明らかであろう。したがってムリテがその一族にとって最も大切なヤマト王権での職掌を全うするには，実際の対外交渉を彼の地で担当する，有明海沿岸の中・小豪族層との関係はきわめて重要であった。こうした有銘大刀をわざわざ作って与えることは充分理由があるものと考えるのである。

このように江田船山古墳とその遺物は，5世紀後半から6世紀前半において有明海沿岸の一地域首長とその一族が朝鮮半島との交渉・交易，それも加耶西部や全羅南道の勢力を相手側の窓口とする交渉・交易や百済との外交に大きな役割を果たしていたことを物語る貴重な考古学的資料にほかならない。さらにこの古墳から出土した有銘大刀は，彼らが果たした役割がヤマト政権の外交のなかでも大きな位置を占めるものであったことを示しているのである。

これに対し，『日本書紀』の敏達十二年条にみえる日羅に関する記載もまた，有明海沿岸の一地域勢力が，対朝鮮半島外交に大きな役割を果たしていたことを示す貴重な文献史料である。そこには，百済にその官位十六階の第2位にあたる達率として仕えた日羅を「火葦北国造刑部靫部阿利斯

登の子」としているが，これは有明海南部の葦北の首長が百済との折衝に長く彼の地に駐在していたことを示すものにほかならない。江田船山古墳のある菊池川中流域といい，この葦北といい，いづれも有明海沿岸地域でも決して大きな勢力とはいい難い。こうした有明海沿岸各地の中小首長層が，対朝鮮半島外交に重要な役割を果たしていることが知られるのである。

なお，この敏達紀の日羅に関する記載のなかに，葦北の首長の子である日羅の「我が君，大伴金村大連，国家の奉為に海表に使はしし，火葦北国造刑部靫部阿利斯登の子」という発言がみられる。これはヤマト政権の中で朝鮮半島との外交を，一定の役割分担にもとづいて共に担当していた中央豪族と有明海沿岸の首長との関係を具体的に物語っているものとして興味深い。

このほか『日本書紀』では，神代紀の宗像三女神の生誕に関する説話の終わりの部分に「三女神を以ては，葦原中国の宇佐嶋に降り居さしむ。今，海の北の道の中に在す。号けて道主貴と曰す。此筑紫の水沼君等が祭る神，是れなり」とある。これは本来，玄界灘～加耶ルートの海上交通の守り神であった沖ノ島の神に対する祭祀に，筑後川河口に近い有明海沿岸の水沼の首長が関わるようになっていたことを示すものにほかならない。この「今」が何時をさすかは明らかでないが，これもまた倭・韓の交渉・交易ルートの中心的荷担勢力が，宗像を含む玄界灘沿岸勢力から，有明海沿岸の勢力に替わったことを示す史料であろう。

むすび

以上4節にわたって論じたところを要約すると次のとおりである。

① 朝鮮半島の西南部に位置する全羅南道の西よりの地域には，5世紀後半から6世紀前半のごく限られた時期に，日本列島の前方後円墳と共通する墳丘をもつ古墳が営まれる。それらの中に円筒埴輪をもつものや倭系の横穴式石室をもつものが存在することからも明らかなように，これが日本列島の前方後円墳の影響により出現したものであることは疑いない。またそれが，それ以前に倭と密接な関係を持っていた加耶の地域にはまったくみられないことは，この時期になって全羅南道の勢力が倭国ときわめて密接な関係をもつようになったことを物語る。このことはまた，日本列島の須恵器の祖型と考えられる陶質土器が，4世紀末から5世紀初頭の段階では加耶のものであったのが，5世紀前半からそれ以降になると，全羅南道地域のものに大きく転換することとも対応する。これらのことは，5世紀前半を境に，倭・韓の交渉・交易の韓側窓口が加耶から全羅南道地域に変化したことを示唆する。

② こうした韓側の窓口の変化に対応するかのように，倭国側でも対韓交渉の中心的担い手が，それまでの玄界灘沿岸地域から有明海沿岸地域に変化したらしい。日本列島で最初の横穴式石室が4世紀末から5世紀初頭にまず玄界灘沿岸に出現することからも明らかなように，この段階ではまだ玄界灘沿岸地域の勢力が，対韓交渉の中心的窓口として大きな役割をはたしていたことが想定できる。ところが5世紀前半以降になると，この地域にはそれまでみられた大型・中型の前方後円墳がみられなくなり，替わって筑後や肥前の有明海沿岸に大型の前方後円墳が営まれるようになるのである。

③ 新しく韓側の窓口となった全羅南道地域の前方後円墳の中には倭系の横穴式石室がみられるも

のがある。この問題を検討した柳沢一男は，それらの中に北部九州系，肥後系，それらの発展型の存在を指摘し，具体的な彼我の影響関係を指摘している。ただこれら全羅南道地域の倭系横穴式石室には個々の形態差も大きく，これを九州の特定地域の石室に限定して影響関係を想定するのは現段階では無理であろう。ただ全体としてそれらが北部九州でも有明海沿岸の筑後地域や肥前東南部などの横穴式石室の影響により成立したものであることは疑いないものと思われる。

④　日本列島の装飾古墳の変遷過程の中で，5世紀前半になってはじめて，3〜4色の彩色を施した石障系の装飾古墳が肥後の地に出現する。特にそれがこの時期の有明海沿岸の肥後の地に出現することの意味大きい。これは5世紀前半頃の有明海沿岸の人たちが，彼の地で彩色壁画古墳の存在を知り，そのアイディアを取り入れて生み出したものと思われる。これまたこの地域の人びとの活発な対朝鮮半島活動を物語るものにほかならない。

⑤　有明海に注ぐ菊池川中流域の熊本県菊水町江田船山古墳とその豪華な金銅製装身具類などの遺物もまた，5世紀後半から6世紀前半のこの地域の人びとの活発な対朝鮮半島交渉を示すものである。特にここでは豪華な百済系装身具がみられるが，これはこの地の首長が，対百済外交を担当していたことを物語るものであろう。またこの古墳には大加耶系の遺物などとともに百済の陶質土器の副葬が認められることから，彼らが百済，大加耶，全羅南道地域などと多角的に交渉していたことが伺える。またこの古墳から出土した銀象眼銘大刀とその銘文は，この菊池川中流域の首長の対朝鮮半島交渉が，ヤマト王権の外交の一端をになうものであったことを物語るものにほかならない。

⑥　日本書紀の敏達紀にみられる日羅を「火葦北国造刑部靫部阿利斯登の子」とする記載も，有明海沿岸南部の葦北の首長の対百済交渉を示すものである。またそれを指示したのが畿内の大豪族の大伴金村であったことも，こうした有明海沿岸各地の首長層の外交活動が倭国の外交活動そのものであったことを示している。また，本来玄界灘沿岸〜加耶ルートの海上交通の安全を祈る沖ノ島の神に対する祭祀に，有明海沿岸の水沼君が関わるようになったことも，対韓交渉の担い手が玄界灘沿岸から有明海沿岸に替わった歴史的事実を反映するものであろう。

こうした検討結果からも，5世紀前半頃を境として倭・韓の交渉・交易活動の中心的な担い手が，朝鮮半島側では加耶から全羅南道地域の勢力に，倭国側では玄界灘沿岸から有明海沿岸勢力へと変化したことは疑いなかろう。これが新羅の加耶への進出，百済と倭国の関係の親密化や，そうした状況への加耶や全羅南道勢力の対応と関連するものであることはいうまでもない。古墳時代における倭・韓交渉や，倭国内の畿内と九州，あるいは九州内の諸勢力の政治的動向を考える際にも，こうした倭・韓交渉の中心的担い手の大きな変化は絶えず考慮されなければならない問題であろう。(4)

註

（1）――本論の趣旨については，2002年3月の歴博国際シンポジウム「古代東アジアにおける倭と加耶の交流」でも報告したが，その後2002年12月に熊本大学で開催された肥後考古学会・熊本古墳文化研究会共催のシンポジウム「古墳時代の日韓交流―熊本の古墳文化を探る―」でも報告し，まさに有明海沿岸の熊本県の研究者のご意見やご批判をいただくことが出来た。小論にその成果をも取り入れていることはいうまでもない。負うところ明らかにし，感謝の意を表しておきたい。

（2）――なお，朴天秀のこの時期の日韓の考古資料に

関する暦年代観は筆者のそれとほとんど共通している。

（3）――装飾古墳の展開過程についての筆者の考えは次の小論に述べておいた［白石 1993c］。

（4）――今回はふれることができなかったが，玄界灘ルートの要衝壱岐では古墳時代後期末から終末期にきわめて大規模な古墳が営まれる。それらの古墳の巨石を用いた横穴式石室の形式が，いづれも九州の有明海沿岸のものに近いことが注意される。これは7世紀においても，有明海沿岸の諸勢力が，朝鮮半島との交渉・交易活動に重要な役割を果たしていたことを物語るものであろう。この問題については稿をあらためて検討したい。

また正倉院文書の大宝二年（702）筑前国嶋郡川辺里戸籍から，嶋郡の大領が肥君猪手であったことが知られる。その本拠地川辺里は，玄界灘沿岸の福岡県志摩町馬場付近と想定されている。かつての伊都国の港にも近いと想定されるこの地に，肥君一族が在地豪族として進出し，定着していることも，5世紀後半以降の倭・韓ルートの支配権が有明海沿岸勢力によって握られていたことを象徴的に物語るものにほかならないと思われる。

引用文献

金洛中　1999「羅州新村里9号墳発掘調査」『考古学を通してみた加耶』第23回韓国考古学全国大会　韓国考古学会（原題名はハングル）

――（竹谷俊夫訳）2001「5～6世紀の栄山江流域における古墳の性格―羅州新村里九号墳・伏岩里三号墳を中心に―」『朝鮮学報』第179輯　朝鮮学会

姜仁求　1987『韓国の前方後円墳―舞妓山と長鼓山古墳測量調査報告書』韓国精神文化研究院調査研究報告書87―1　韓国精神文化研究院

小林行雄　1964『装飾古墳』平凡社

酒井清治　2002「須恵器生産のはじまり」『古代東アジアにおける倭と加耶の交流』第5回歴博国際シンポジウムレジュメ　国立歴史民俗博物館

除聲勲・成洛俊　1984『海南月松里造山古墳』国立光州博物館

白石太一郎　1985「年代決定論㈡―弥生時代以降の年代決定―」『岩波講座　日本考古学』岩波書店（「弥生・古墳時代の暦年代」として『古墳と古墳群の研究』塙書房　2000年に再録）

――　1986a「韓国の前方後円墳」『歴博』17　国立歴史民俗博物館

――　1986b「後期古墳の成立と展開」岸俊男編『王権をめぐる戦い』日本の古代6　中央公論社

――　1993a「古墳成立論」『新版古代の日本』①古代史総論　角川書店（『古墳と古墳群の研究』塙書房　2000年に再録）

――　1993b「弥生・古墳文化論」『岩波講座　日本通史』第2巻　古代1　岩波書店

――　1993c「古墳壁画からみた他界観」『国立歴史民俗博物館研究報告』第80集

――　1997「有銘刀剣の考古学的検討」『新しい史料学を求めて』歴博大学院セミナー　吉川弘文館

――　2002「倭国誕生」『倭国誕生』日本の時代史1　吉川弘文館

成洛俊　1992「咸平礼徳里新徳古墳緊急収拾調査略報」『第35回全国歴史学大会発表要旨』歴史学会

高木恭二　1994「九州の刳抜式石棺について」『古代文化』第46巻第5号

田中俊明　2001「韓国の前方後円墳の被葬者・造墓集団に対する私見」『朝鮮学報』第179輯　朝鮮学会

東亜大学校博物館　2000『固城松鶴洞古墳群現地説明会資料』（原題名はハングル）

朴仲煥　1996『光州明花洞古墳』国立光州博物館学術叢書　第29冊　国立光州博物館

朴天秀　2002a「栄山江流域における前方後円墳の被葬者の出自とその性格」『考古学研究』第49巻第2号

――　2002b「大加耶と倭」『古代東アジアにおける倭と加耶の交流』第5回歴博国際シンポジウムレジュメ　国立歴史民俗博物館

松本雅明　1973「古墳文化の成立と大陸」『東アジアと九州』東アジアと九州1

柳沢一男　2001「全南地方の栄山江型横穴式石室の系譜と前方後円墳」『朝鮮学報』第179輯　朝鮮学会

山尾幸久　2001「五，六世紀の日朝関係―韓国の前方後円墳の一解釈―」『朝鮮学報』第179輯　朝鮮学会

李榮文　1990『長城鈴泉里横穴式石室墳』全南大学校博物館

林永珍　1994「光州月桂洞の長鼓墳二基」『韓国考古学報』31　韓国考古学会（原題名はハングル）

（国立歴史民俗博物館考古研究部）

（2003年5月28日受理，2003年7月18日審査終了）

国立歴史民俗博物館研究報告
第110集 2004年2月

또 하나의 倭・韓교역루트

白石太一郎

한반도 서남부에 위치한 전라남도의 서쪽 지역에는 5세기 후반부터 6세기 전반의 극히 한정된 시기에 활발히 前方後圓墳이 造營된다. 그 중에서는 圓筒埴輪를 갖는 것과 倭系横穴式石室을 가진 것이 존재하는 것으로부터도, 이것이 일본열도의 前方後圓墳의 영향에 의해 출현했다는 것은 의심할 여지가 없다. 그것이 그때까지 倭와 관계를 가지고 있었던 加耶의 지역에는 전혀 보이지 않는 점은, 그 시기가 되어서 전라남도의 세력이 倭國과 지극히 밀접한 관계를 가지게 되었다는 것을 나타내고 있다. 이것은 또, 일본열도의 須惠器의 祖型으로 생각되는 陶質土器가 初期 加耶의 것에서부터 5세기전반을 경계로 倭・韓의 교섭・교역의 韓중심적 창구가 加耶로부터 전라남도지역으로 변화했던 것을 시사하고 있다.

이러한 韓側의 창구 변화에 대응하려는 것처럼, 倭國측에서도 對韓교섭에서 중심적 역할을 담당했던 것이, 그때까지의 玄界灘沿岸地域으로부터 有名海 연안지역으로 변화한 것 같다. 5세기전반이후, 玄界灘 연안에서는 그때까지 볼 수 있었던 비교적 대형 前方後圓墳이 볼 수 없게 되고, 그 대신 筑後와 肥前의 有名海연안에서 대형 前方後圓墳이 만들어지게 된다. 한편 전라남도지역의 前方後圓墳에서 볼 수 있는 倭系横穴式石室은, 北部九州에서도 有名海연안의 肥前東南部나 筑後지역의 横穴式石室의 영향에 의해 성립된 것에는 의심할 여지는 없다. 또 複數의 채색을 펼친 본격적 裝飾고분이 성립한 것이 有名海 연안의 肥後지역인 것은 중요하다. 그 성립 배경에는, 한반도의 고분벽화에서 어떠한 자극을 받은 것으로 생각되기 때문이다. 熊本縣 菊水町의 江田船山古墳과 그 호화로운 金銅製裝身具類등의 副葬品도 또한, 5世紀후반부터 6世紀전반의 이 지역의 사람들의 활발한 對韓半島交涉을 나타내는 것이다.日本書紀의 敏達紀에서 보이는,日羅를 「火葦北國造刑部靫部阿利斯登의子」라고 하는 記載도 또한, 有明海沿岸南部의 葦北 首長의 對百濟交涉을 나타내는 것이다.더욱이 그것을 지시하는 것이 中央의 大伴金村이었던 것도, 이러한 有明海沿岸各地의 首長層의 외교활동이 倭國의 외교활동일수 밖에 없다는 것을 나타내고 있다. 더구나, 玄界灘沿岸~加耶루트의 해상교통 안전을 기원하는 沖ノ島의 제사에, 有明海沿岸의 水沼君이 관계하게 되는 것도, 對韓交涉의 담당이 玄界灘沿岸으로부터 有明海沿岸으로 바뀐 역사적 사실을 나타내고 있는 것일 것이다.이러한 검토결과로부터도, 5世紀전반무렵을 경계로, 倭・韓의 교섭・교역활동의 중심적 역할을 담당했던 것이,韓半島側에서는 加耶로부터 全羅南道地域의 세력으로, 倭國側에서는 玄界灘沿岸으로부터 有明海沿岸勢力으로의 변화한 것은 의심할 수 없다.

Another Route of Trading Activities and Interaction between Wa倭 and Han韓

SHIRAISHI, Taichiro

In the region to the west of Jeollanam-do situated in the southwest of the Korean Peninsula, many keyhole tombs were made for a very limited period of time between the second half of the 5th century and the first half of the 6th century. The existence of cylindrical haniwa clay figurines and Wa-style stone chambers with side entrances leaves no doubt that these appeared as a result of the influence of keyhole tombs found in the Japanese Archipelago. The fact that these are nowhere to be seen in Gaya which had had very close relations with Wa up until that time suggests that during this period the authorities in Jeollanam-do came to have extremely intimate relations with Wa. This also corresponds to the changes that occurred in respect to grey-hard earthenware, which is believed to be the forerunner of Japanese Sue ware, whereby after being made in early Gaya up to the first half of the 5th century it was to be found in the Jeollanam-do regions. This suggests that by the first half of the 5th century the central point of contact on the Han 韓 side for trade and relations with Wa had shifted from Gaya to the Jeollanam-do region.

It would appear that the shift that occurred on the Wa side whereby the central location for conducting relations with Han shifted from the Genkai Sea coast to an area along the Ariake Sea coast corresponds with this change in the location of the point of contact on the Korean side. After the first half of the 5th century no more relatively large-sized keyhole tombs were to be found in the Genkai Sea coastal region, and instead large keyhole tombs came to be built in Chikugo and Hizen along the Ariake Sea coast. There can be no doubt that the Wa-style stone chambers with side entrances found among the keyhole tombs in the Jeollanam-do region were built due to the influence of similar stone chambers built in northern Kyushu and in southeastern parts of Hizen and in Chikugo along the Ariake Sea coast. The existence of full-scale ornamental tombs decorated in a number of colors in Higo on the Ariake Sea coast is also significant. This is because it is believed that their formation was due to some form of stimulus from the wall drawings in tombs situated in the Korean Peninsula. The Etafunayama burial mound in Kikusui-machi of Kumamoto Prefecture and the splendid gilt bronze personal ornaments found inside also indicate a high level of activity between the people of this region and those in the Korean Peninsula from the second half of the 5th century

through to the first half of the 6th century. The description of *Nichira* 日羅 found in records of the reign of *Bidatsu* (572-585) contained in the Nihon Shoki (Chronicles of Japan) also point to relations between the chief of *Ashikita* 葦北 and Paekche. The fact that this is further indicated by mention of *Ootomo-no-Kanamura* 大判金村 in central Wa shows that the diplomatic activities of the ruling class in the regions along the Ariake Sea coast were none other than diplomatic activities for the state of Wa. This is also borne out by the involvement of *Minuma-no-kimi* 水沼君 from the Ariake Sea coast in religious rites held on Okinosima Island in which prayers were offered for the safety of shipping along the route from the Genkai Sea coast to Gaya points to the shift of responsibility for conducting relations with Korea from the Genkai coast to the Ariake Sea coast as historical fact. From the findings of such investigations there can be no doubt whatsoever that by the first half of the 5th century those playing a central role in trading activities and interaction between Wa and Han shifted from those in power in Gaya to their Jeollanam-do counterparts on the Korean side and on the Japanese side from those in power on the Genkai Sea coast to their counterparts along the Ariake Sea coast.